

南限から北限へ 研究者から案内人へ

齋藤氏が『黒松内町ブナセンター』の職員となったのは、2002年春。以前は、大学院で森林生態学を学び、東南アジアの熱帯林や日本各地の森林調査の後、南限域（太平洋側）のブナを研究していた。

偶然出会った人が黒松内に関係する人で「南限の次は北限はどうだ」と誘われ、「どこかひとつの場所に腰をすえて自然の仕事がしたかった」という思いと合致し、職員の公募に申し込んだ。「もちろぬブナを町づくりの中心にすえていることに惹かれましたけど、おもしろいと思ったのは黒松内

町では観光ではなく交流って言うんですね。観光だとお客さんになるけど、交流だと家族のよくなもつと近しい感じがして。その感覚が自分に合うような気がしたんです」

齋藤氏が担当するのは「学校教育部」だ。海外の博物館では、調査研究・教育普及・展示資料収集と4つの柱で役割分担されているが、

日本では学芸員がすべてやることが多い。ブナセンターはミュージアムのオタゴ博物館に範をとり、学校教育部を設けて専門職員を配置している。その4代目となるのが

齋藤氏だ。ちょうど総合学習が始まったことも重なり、ブナセンターに野外教育を求める学校が急増している。中には学校から委託された旅行会社から問い合わせがくる

こともある。「先生と直接打合せをしたいとお願いしています。目的は何なのか、子どもたちに何を教えたのか、先生と打合せや下見を繰り返してプログラムを決定するからです。ブナ林はもちろん、川も山も黒松内は教材の宝庫ですから、おおいに活用してほしいんですよ」。ブナに惹かれてやってきた若者は、すでに黒松内の人間となつてしっかり根を下ろしているようだ。

この里を誇りに思う 森の仲間を増やしたい

日本のブナ林は東北地方に多く、北海道では渡島半島が分布域で黒松内はその北限となる。北限域最大の大ブナ群落である歌オブナ林は1928年に天然記念物の指定を受けている。各地のブナ林をみてきた齋藤氏によると、黒松内は「なぜここがブナの北限なのか」また「今後さらに北進するのか、あるいは後退するのか」まだわかっていない「ド

ラマチックな場所」なのだそう。そんな貴重な自然林が、本州では標高500～1500mの山の中腹でしか見られないのだが、黒松内のブナ林は身近な平地にあり、いつでも誰でも見ることができるのだ。「でも、天然記念物だからとか北海道遺産だからとかじゃなくて、自分の目や

身体でブナ林のおもしろさを知ってほしい。その上で、心から誇りに思える人が増えると、森を守る大きな力になると思うんですよ」

今後、齋藤氏は子どものガイドを育てていきたいという。子どもにガイドをされると大人はみんな真剣に耳を傾けるのだそう。すでに齋藤氏と一緒にガイドの手伝いをしてくれる子どもたちもいる。齋

藤氏が子どもたちから呼ばれている愛称は名前均かからとった「きんちゃん」だ。先生でもお兄さんでも齋藤さんでもない。きつと森で遊ぶ仲間に近いのだろう。「みんなが大人数になった時、いつも森に連れてってくれるきんちゃんって変な人いたよね、くらいに覚えてもらえば本望ですよ」。温故知新という言葉が好きだという34歳の森の案内人は、今日もかんじきを履いて子どもたちと森を歩いているだろう。



北限のブナ林

ブナは温帯の代表的樹種として北半球中緯度地方に広く分布する。黒松内の歌オブナ林は、ブナの北限分布の特徴として、ブナの優先度が低く（全体の6割程度）、シナノキ、ミズナラ、シラカンバなどが混交。ブナの落葉したその層は高い保水力を持ち、「ブナの森は緑のダム」ともいわれる。その新緑や黄葉、灰白色の木肌の美しさが見直されるようになり、ブナ林を楽しむ人たちが四季を通して訪れている。



1 尊敬する故波谷吉尾名人が残してくれたかんじきの修理を一手に引き受けている 2 お気に入りのブナの木。最近は夜空とブナ林の撮影にも挑戦中 3 1.5mもの積雪のおかげで、冬はブナの冬芽も間近で見られる

齋藤 均/さいとう ひとし 1972年仙台に生まれ、横手、鶴岡、弘前と高校まで雪国で育つ。横浜国立大学大学院で森林生態学を学び、東南アジアの熱帯林や日本各地の森林を調査する。趣味は焚き火、釣り、登山、スキー、野遊び。黒松内の自宅に薪ストーブを購入し、家の中で焚き火ができる日々を楽しんでいる。